

橋本武美の場合

息子が知的障害を伴う自閉症（当時小4）

居住地：仙台市宮城野区

録音日：2023 年 5 月 18 日（前編）、11 月 30 日（後編）

（前編）

お話：橋本武美

聞き手：高橋和子

橋 震災の時に大事だったことをそのままにしちゃいけないなって思ったことを、和子さんが聞いてくださるって
いうことだったので、とりとめもなくお話しします。

和 そうしてください。

橋 もう 10 年以上前だけれども、仙台市にずっと住んでいて、そろそろ大きい地震が来る来ると言われてたので、
もう備蓄はバッチリでした。カップラーメンだったりカセットコンロだったり、ウィダー・イン・ゼリーみたいな飲
むゼリーだったり、本当に色々もう取り揃えておりました。

和 おー。

橋 それは、当時は小学部 4 年生の私の息子が知的障害で、3 歳ぐらいの知能で。

和 当時、うん。

橋 当時も今も（笑）同じぐらいなんです。発達障害で自閉症で、コミュニケーションがとても難しくて、人にお任
せするとか人と一緒に行動するとか、みんながワヤワヤいる避難所に避難するってということが適わない子どもだった
ので、できる限り備えていました。

和 なるほど。

橋 3 月 11 日は学校が卒業式で、卒業学年じゃない私たちはお休みでした。普通のお子さんの児童クラブのように、
放課後デイサービスっていう、学校が終わったあととかにちょっとお預かりして遊んだりとか、おやつ食べたりする
ようなところに行っていました。それは大学病院の近く、柏木だったんですけども。もちろん取り決めとかもあって、
地震とかがあった場合には、送迎には出ない。入れ違いになっちゃったりしたら大変なので。で、みんな必ずその
児童デイの場所に迎えに来るっていう約束事があって。うちは 14 階建ての免震マンションの 8 階で真ん中らへんで、
揺れはもうものすごかった。いつまでもいつまでも揺れが終わらないような。でも免震ってそうやって……

和 逃すのね、揺れてね。

橋 そう。横に揺れて揺れて被害を逃すものなので、ずーっとずーっと揺れて、もう建物のそのきしむ音で、ダメか
もしれない、このマンション崩れんのかもしれないって思った。もうその時には、全部もうみんなダメだろうって。

和 ガタガタではなく、ねー。

橋 ガタガタではない。もう最初はとにかくドカンドカンって縦揺れが来て、そのあとの横揺れが、やっぱり経験し
たことがないほどで。今も地震酔い？とかは、私は治ってないです。しょっちゅう「あ、揺れてる！」とか。その時
キッチンにいたので、流し台につかまって立っていた（笑）

和 あー、私と一緒に。私もキッチンに立ってたんです。

橋 流し台のふちにつかまっていたから、私自身は安全で、実際には本当に何も、揺れて逃してるから物も落ち
ない。昼間だったから電気のことは気にしてなかったし。で、収まってきて、あ、息子を迎えに行かなくちゃいけな
いんだって。

和 うんうん。

橋 連絡がつかなくても、とにかく行かなきゃならないんだっていうので、もしかしたら車中泊になるかもしれないことを考えて、ペットボトルの飲み物とか、お菓子みたいな本人がつまめるものとかをガーってエコバッグみたいなのに入れて、車に乗って。うちは小田原なんだけれども、そこから柏木に向かうのに、仙塩街道っていうのかな、48号がもともといつでも混んでいるような道だけれども、結局大きい道が一番安全っていうか、狭い道でもし通れなくなったら身動きがとれなくなっちゃうかもしれない。大きい道なら時間がかかっても安全だと、左右に車が停まってたとしても真ん中1車線ぐらいは必ず通れるだろうっていうので、大きい道に行って向かう。だけれども、もう普通の何倍かかったか分からない。もう着いた時には暗くなっていたんですよ。

和 ヘー。小田原から柏木までね。

橋 そう。普段だったら20分くらいの道なんだけれども、着いたのがたぶん19時を過ぎてた。で、真っ暗でももちろん信号もついてなくて、電気も何にもなくて、ただ車はライトがつくから、道路で動いてるとか、停まっててもテールランプとか、そこだけは明るい。だけど信号が消えてて、渡る人とかもその真っ暗な中で、左右の隣同士の車とか向かいの車とかも協力しながら、渡る人をここ渡らせよう、どうせ詰まってるんだからとかって、パッシングしたりして協力し合いながらやって。その時はまだ全然警察の手は入ってなくて、みんなのちょっとした心遣いだけのことで、「あ、ここはダメだ、渡らせなきゃ」とか、そうやって停まりながら、信号ないけどやってた。でもそれで本当に遅々として進まなくて、着いたら真っ暗で。ただ、その児童デイは日ごろから避難訓練とかをちゃんとやってくれてたので、庭にテントを建てて、その中で、「避難した時にその中に逃げ込むよ、頭を押さえるよ」とか、常に常にそういうことを子どもたちにしみ込ませてくれてたので、大きなパニックにはならなかった。

和 そう。

橋 なってなかったそうです。ただうちがお迎えに行くのが一番最後になってしまって、かわいそうだったんだけど、レトルトのカレーを食べさせてくれて、「カレー食べました」って。ちゃんと待ってて、全部食べましたよって。しっかり。まあ本人は訓練なのか、初めてだから何が起きたのか分かんないけど、安心できる場所で安心できる人たちといつものことをしてるから、普通にばくばくカレーも食べて、パニックになることもなく待っててくれました。そのデイに対して本当に日ごろのそういう避難訓練とかに感謝でした。

和 そうですねー。

橋 着いた時、迎えに行った時は別に泣きもしなかったし、何が起きてるかは分かってないので。

和 じゃあお母さんの顔を見てワーッと泣くとか、そういう感じでもなく、結構淡々として。

橋 そう、ご飯食べたよーみたいな（笑）

和 そっかー。

橋 なので、そこで私も、本当はスタッフさんたちとかと「あー大変だった、大丈夫でしたか」って、「申し訳ありません最後でー」とかいろいろ、もうワーッとやりたかったけど、本人の前でそれをやっちゃいけないな、本人の前では淡々と、「はい、お迎え来ましたよ、テントにいましたね、食べましたね、じゃあ車に乗りますよ。信号は消えます。で、電気も全部消えます。だけど大丈夫です、お母さんと帰りましょう。エレベーターは停まっているので階段で上がります」って、いろいろ最低限のことだけ予告をして。

和 いつもと違うポイントをね。

橋 いつもと違う、本人が「え？」と思うだろうなっていうことを、パニックを避けるために先に伝えて、「さあ乗りましょう、ちょっと時間はかかるよー、トイレ大丈夫？トイレだけ行っとこうか」「あ、さっき行きましたー」「ありがとうございましたー」って車に乗せて。だけど帰りは結構スイスイと、逆方向なので。

和 あーそう。

橋 下りの方向というか、大学病院に向かっていく道じゃなくて反対側なので、帰りはスイスイと帰ってきて、伝えてあるから非常階段を、じゃあうんとこしょーどっこいしょーって上がろうねーと。

和 8階に。

橋 8階に上がってって、「家の中は真っ暗だよ、懐中電灯あるよ」って。で、彼が懐中電灯をつけて入ってって。だから避難訓練の続きのような感覚なのかな、もう全然慌てもせず騒ぎもせずでしたね、息子は。

和 長い長いその階段をのぼったりするのは、別に苦もなく？

橋 苦もなく。知的障害・発達障害があって、あと生まれた時に800グラムで超未熟児ちゃんだったので、関節は

硬いかかそういうものもあるけれども、麻痺とかはないし、肺がかなりダメになってて普通の人より小さいけれども、日常生活には問題のない人で、運動的にも問題がない人だったので、私のほうがつらいから（笑）途中で1回「じゃあ5階で休もうね、はあーっ」とかって言いながら、「ありがとねー、じゃあまた行こうね」って。もう全然。今思えば本当に全然……本人の中でも結局把握できないっていうか、経験のないことで。

和 でも初めてでしたよね、きっと。お母さんも初めてだったでしょうけど。

橋 いやでもね、マンションも避難訓練はやってましたね。

和 そうですか。

橋 ただ、子どもは避難訓練に参加してなかったから、マンションの階段を8階は初めてだったかもしれない。でも大丈夫でしたね。で、真っ暗な中で、夜も服薬があるので、「お薬飲もうねー」ってお薬を飲ませて、まあ寝るのも……あ、そうだ、布団をダダダーッと敷いてから行ったんだ。もう帰ってきた時にすぐに布団に入れるようにしておいたから、「今日はお風呂は入りません、着替えも明日の朝します」。で、うちに帰ってきて「トイレは行こう、トイレも懐中電灯を置いて、ちょっと暗いけど、大丈夫だね、見えるねー」ってもちろん開けっぱなしにして私が一緒にいて。ずっと大丈夫だったんですよ、泣きもしないし。

和 暗闇は？

橋 真っ暗でもなく、ここには懐中電灯、こっちにはコンセントに差すタイプのライトとか。常夜灯みたいなのか、とりあえず真っ暗にはしないようにして。

和 そのぐらいの明かりで大丈夫だったんですね。

橋 思えば何とか。私がつきっきりで、私が1つ強力ライトを持っていたので、何とか大丈夫でしたね。

和 絶えず話しかけるみたいな、そんな感じでしたか？

橋 うん、無駄なことは言わずに。結局これからどうしたらいいのかとか、いつもと違うことを予告しておくけど、私がとにかく取り乱さない（笑）本人の前で取り乱さないことがとても大事だったので。それで、お薬は寝る薬なので寝てくれたの。それで、ああ寝てくれたー、良かったーって。朝になったら電気がなくても大丈夫だし、とりあえず寝てくれたから。あとは少し明るくなれば着替えもできるし。3月であの日は雪がちらついたりとかしていたから、寒さは……。

和 すごい寒かったの。

橋 毛布とかは、もう布団とかかき集めて、寒くないようにって。そうだ、服も着たまま、だって次また来るかもしれないから。

和 そう、夜中！ね、どんな動きになるか分からないからっていうので、服でね。

橋 そう、「着替えないよ、このままだよ」って寝かせたんだ。自分もちろん何があっても動けるようにしていたし。夫とも電話はもちろん通じないけど、メールで連絡がついて、とりあえず息子と私は大丈夫と。夫のほうは仕事で詰めなきゃならないから、家にいつ帰れるか分かんない。そうかあーって思ったけど、まあ本人が落ち着いてくれたから、じゃあとにかく私が寝ないでいればいい。次いつまた揺れが来るか分からないから、とりあえず本人の睡眠だけは確保しようって。でもやっぱり眠れはしない。で、ベランダを開けて眺めたら、真っ暗なんだけど、仙台港のほう？そっちのほうに燃えてる火が見えて。

和 そうか。お住まいが高いとこだから。

橋 うん、8階なので。コンビナートでしたっけ。そっちのほうの火災が見えました。やっぱり匂いも。この匂いは、あーやばいものが燃えてる匂い、みたいな。うっすらと、何かが起きてるって。もちろんその頃スマホではなかったから、情報源がラジオだけで、夜中ぐらいいらだんだん津波のこととかをラジオでも言い出したのかな。だけど、やっぱり何も分からない、海の近くじゃないし。そうか津波が……どうやらそっちのほうに燃えている。サイレンもすごかった。真っ暗で静かな中で……。

和 結構近くに？

橋 いや、たぶん海のほうの火災とか？

和 遠くのサイレン？

橋 まあ近くでも何かは起きてたかもしれないけど、火は見えなかった。たぶん海のほうのサイレンみたいなのが聞こえてて、大変なことになってるんだって。でもとりあえずこのあたりに火の気はなくて、煙も出てなくて。とにかく

く朝になったら、朝になったら……って。それまで情報はないだろうと。で、ちょっとウトウトもしながら。で、起きてなぜか落ち着いていられたから、カロリーメイトみたいなものとかを食べて。それこそ火が使えなくても、電子レンジが使えなくても食べさせることができるものを用意してたし、時々食べさせてた（笑）うちの中の避難訓練みたいなことで。「わーおいしいよねー」なんて。「今日のオヤツこれ食べてみようかー」って。

和 味もね、トレーニングしておいて。

橋 そうそう、食べられるものを確かめなきゃいけなかったの。そういう食べれるものを、支援学校でそれぞれの避難リュックに備蓄しておくようにってということとかを PTA でやってたの。本人が食べられないのに乾パンを入れておいたってしょうがないんです（笑）そういう障害のある人たちって食べられるものがものすごく限られたりする人が少なくないから。うちは割と何でも食べるほうだったの、カロリーメイトとかも食べれるし、固いものでも食べれるし。ただ緊張すると水分を摂らなくなっちゃう、飲めなくなっちゃう人だったから、水分を最低限摂らなきゃいけない時のために、ウィダー・イン・ゼリーみたいなゼリー飲料は、それだけでも水分摂ってくれってということで、たくさん備蓄してた。なので食べるほうも困らず、まあとイレも、お風呂に水を溜めてたから。まあ流れなくてもそのお風呂の水とかを使って何とかできるはずだって。

和 直後はまだ水が出たんですね？

橋 うん。直後は、えーとね、1 日ぐらい出た。マンションなので、その上のタンクが尽きるまで、1 日か 2 日は、普通にじゃないけど。皆さんがたぶんお風呂は溜めてて、あと最低限で。ダバダバ使ってる人はいなかったと思う。ちゃんと考えて使って、すぐには止まらなかった。ガスは使えないけど。で、ずーっと雪が降ってたわけじゃなくて、次の日は、何とか大丈夫だ、今日は雪は降らないしって。で、だんだん情報が入り始めたら、本当に大変なことになっている。この辺はシーンと何にも倒れてないし大丈夫だけど、恐ろしいことが起きて、すぐに福島原発が大変だって、電気が戻ったらその映像ばかりだったじゃないですか。原発どうするんだって決死の作戦みたいなことで、ヘリが原発の上を飛び回るとか、そして津波のこととかも。あー大変なことが起きてるって。でもとりあえずここは守られてはいる。マンションの人たちは避難所に行ってる人もいました。学区の小学校は徒歩 30 分ぐらいのところ。

和 結構遠いんですね。

橋 結構遠かったの。うちが学区の一番へりに住んでいたので、東六小が避難所だったんです。だけどそこは、仙台駅から一番近い小学校、避難所だったので、東六が大変なことになって、っていう情報が。

和 人で。

橋 駅から流れてくる人とか外国人とか。で、マンションの人たちも戻ってくる。「とてもあそこにはいられない」って。

和 そう。

橋 マンションが大丈夫なら、エレベーターは使えないけどこっちのほうのマシって、戻って来てました。で、うちはもう最初から避難所には行かないって決めていたので、マンションが崩れたらもうしょうがない、2 人で死のうってということで（笑）それよりもあなたの心の平穏が大事だと。食べ物もあるし、日ごろのお気に入りのグッズがある場所だから、ここにしかいられないのよと。大丈夫です、お母さんがここにいるからって最初は思った。で、だんだん被害のこと、原発のこととか津波のこととか情報が入り始めたけど、とりあえずここにいるしかない。いれば大丈夫。目の前にコンビニがあるけれども閉まってる。トラックが着かないから何もなくて閉まって、いつ物が入ってくるか分かんないってことがだんだん分かってきて。周りの個人商店とかがどんどん無くなっていた地域で、だけどころって徒歩 10 分ぐらいのところに 2 軒、八百屋さんと、なんかよく分かんないものを売ってる怪しいお店があって（笑）とにかく家にこもっていても、何も、ね、本人の普段のお気に入りの CM は無いし、ただただ、「AC 〜」っていうあの CM が流れて、ニュースニュースニュースでそれを見るしかなくて、チラシは来ないし。時間になったら「じゃあご飯を食べよう」「トイレ行っとこうね」とか、カセットコンロでお湯を沸かして「体拭こうねー」とか。で、本人は不思議なぐらいパニックを起こさなかった。何かが起きて、自分がちょっと許容できない何かが起きているんだなあっていう感じかなあ。

和 日ごろの息子さんからしても、落ち着いてたって感じ？

橋 とてもとても大人しく。

和 でもそれはある意味、何かやっぱり、ちょっと普段と違う緊張状態にはあったんですね。

橋 緊張状態、あんまり動かなく、どんどん動かなく、座ったまんまでどんどん動かない。表情もどんどん無くなっ

てきてっていう感じだったので。3日後ぐらいに支援学校の、地区担当の先生とかが見には来たの、安否確認。「あー大丈夫だねー、良かったねー」「先生すいません、8階まで上がって来てくれたんですね」「上がってきたわー、大丈夫ね。みんなのところに回ってるから、ごめんね、じゃーねー」みたいな。結局安否確認だけで、このあとのこととかはまだ全然分かんないから、分かったら連絡が行くからねーっていうので、先生が1回来てくれた。

和 3日後ぐらいに。

橋 そう3日後ぐらい。実はその前に、バイクで動ける先生が1回安否確認に来たらしいんだけど、その時たまたま2人でリュックしょって「ちょっとコンビニを覗きに行ってみよう」とかってやってた時だったのか、会えなかったの。連絡手段は、電話がその頃は全然つながんかったし、担任の先生は次に行かなきゃなんないから、そのまま帰ったの。帰ったことも知らなかったけど、その3日後ぐらいに来た先生に「あの先生来たんだよー実は」「あーそうなんですか」「いなかったって言って」「すいませんでしたー」って。そういうのもあった。

和 うんうん。

橋 だけど、学校がいつ始まるとかも分からないし、学校に何か助けてもらうっていうことは、支援学校はものすごく遠かったの……。泉の南中山の光明支援学校っていうところで、もちろんみんなスクールバスで遠くから通ってたんだけど。だから学校に何か頼ることはできない。避難所はとても遠いし、とても今行っちゃダメだっていうような状態になってる。ちょこちょこマンションの人と言葉を交わしたりしながら、食べるものはありますって言って。やっぱり「大丈夫？」って聞かれて「大丈夫です」って言っちゃうんですね（笑）みんな大変だろうって思ってるし、うちは今のところ水も食べ物もあるし、本人が家にいられるから、「落ち着いてから大丈夫です、何とかなってます」って言ってましたね。いつまで続くかその時は分かってなかったから。でもこのままいるとこの子にも良くないんだよねーって。運動不足だし、先の見通しが何にもないし、お楽しみがないので。買い物もコンビニがいつ開くか分かんないような状況だから、自販機めぐりとかをやってみようかなと。自販機で買える物があるかもしれないし、お散歩に行こうねって。自動販売機は本人も好きだったし、「自動販売機に行こう」ってリュックをしょって2人で非常階段から降りてって、自販機めぐりっていうことにしてたけど、その「お店が2つあったな」っていうところをルートに入れて、もしも何か買えたらと思って行ったら、八百屋さんでちょっと買えたの。何を買ったか、ちょっともう忘れてしまったけど……。

和 八百屋さんだから、野菜ですよ？

橋 八百屋だけど……野菜じゃなかったかも。普段は買うこともない缶のジュースだったりとか、何か違うものを買ったかも。野菜も買えたかもしれないけど、何かを八百屋さんで買った。で、もう1個、ちょっとわけの分からない（笑）怪しい入ったことがないお店も、実は野菜も売ってるし、外国人向けの調味料みたいなものを扱ってて、お惣菜とかも手作りの物を売ってるようなお店だったの。で、お惣菜とかをちょっと買えた。「うちはプロパンだから、火が使えるから」って言って。その初めて入ったお店で。

和 今まで入らなかった、怪しげな（笑）

橋 ああ、もっと早く入っておけば良かったーって。そうか、そういうお店だったのかーって。あとやっぱりお菓子とかも、ちょっと普段は買わないような、外国製だったかもしんない。でも、たぶんすごくプレーンなビスケットだなとか、そういうものとかを買えたの。うちはもうパッと見て障害者だって分かるような、「あーあー」言ったりとかの人だから、「何か困ってんだろう、また来い」みたいな感じで（笑）、実はとても優しいお店だった。「ありがとうございますー」って。「ちょっと自販機めぐりとかやってみますー」って。で、自販機もめぐって。

和 自販機は補充されてました？

橋 自販機は、最初のうちは、普段は飲まないような、エナジードリンクじゃないけどデカビタ？みたいな、ああいうのとかをちょっと買えたかな。でもほとんどやっぱり売り切れで、すっごくラッキーな時に「あ、補充されてたー！」と買って買ったこともあった。そういう時には何本か買って、息子のリュックにも「持って帰ろうねー」って詰めて、「やったね、今日の成果だよー」って。買えた時もあるっていうぐらいだな。ルートに2軒ぐらいコンビニは入ってるけど、なかなかコンビニは買えず。

和 買えず。ずっとクローズのまんま？

橋 ずーっとじゃないんだけど、ちょっと開いて、人が並んでるとうちは並べない。

和 あ、並ぶのが難しかったんですもんね。

橋 人が20人とか並んでしまっていると、その頃息子は、悪気は無いんだけど、前に並んでる人を蹴ってしまっていたし、力の加減が分からない人なので、結構痛い（笑）蹴られた人はすごく「痛っ！」って、大人も「痛っ」って言うような蹴り方をするので、並ぶことができなかった。あー開いてるー、でも20人並んでるー、無理だーって。
和 あー。

橋 4年生ぐらいになると結構、私が押さえても押さえ切ることはできない。腕を押さえても足は蹴ってるし（笑）

和 そうですよ。4年生の最後でしょう？もうすぐ5年生っていう3月ですよ。体大きくなってますよね。

橋 そう。だから、あー並ぶことができないーって。仕方がない、帰るって。本人も何で待たされてるのか分かんなくなっちゃってギャーギャー騒ぎ出すので、「あーごめんごめん、分かった分かった。帰ろうねー、そうだよね、散歩だねー」って帰って。でも、実はマンションの向かいにコンビニが1軒あったの。

和 へー。

橋 ただクローズだし、盗難予防で新聞紙とかを貼られているし、何時にトラックが来るとか教えてもらえなかったの、トボトボそうやって帰って来たりしたけど。まあ家にあるもので全然、食べ物は大丈夫だった。だけど、できればおにぎりとか、パンがやっぱり……パンを食べさせたかった。パンは無かったから。日持ちがあるからパンは置いとけないから、パンを食べさせてあげたいなーとか。ずっとサトウのごはん。あ、ごめんなさい、商品名を出すと（笑）サトウのごはんが悪いわけじゃないんだけど。ずっとカロリーメイトとかカップ麺とかじゃなくて、何か食べさせてあげたいなーと思ってたので、8階からしょっちゅう私は覗いていて、トラックが来た！と思ったら、もうすぐ開くもうすぐ開く……ってしょっちゅう見てて、開いた！っていうタイミングで、「ちょっと行ってくるね」って、もうダッシュで。

和 「ちょっと」ってどのぐらいだと大丈夫なんですか？

橋 どうだろう、その頃は留守番をさせたことがなかったけれども……まあ大丈夫だろう、追っては来ないだろう。でも追ってきたとしても目の前のコンビニだから、あーもう裸足で出てきちゃったーとかってなっても何とかなるかもしれない（笑）ぐらいの感じで、ちょっとやってみた。もうそこはチャレンジで、もう行かなきゃない、行くしかないって。で、リュックしょって「ちょっと行ってくる、すぐ帰ってくるよー」とかって行ってみた。開いたばかりだったから並んでなくて、ああ買えた！ってすぐ戻れたんだけど、やっぱりその当時はおにぎり一人2個までとか、パン何個までとか、全部で買い物5個までとか制限があったから。

和 あったあった。パン2個にしたんですか？（笑）

橋 うん。パンはなかった。おにぎりとお菓子とかだけど、おにぎりは2つしか買えないって。一応「すいません、障害のある息子が、旦那が並べなくて私だけ来たんですけど……」って言うみたけど「ごめんなさい、一人2個なんです」って言われて「ああそうですよねー」って。まあ1個ずつ分ければいっかーって。仕方ない、今度本人の機嫌がいい時だったら連れて来てみよう、目の前だから。で、外に出たら、若いお兄さん、大学生ぐらいのお兄さん2人から「買えましたかー？」って聞かれて。そういえばさっき買い物してた2人だと思って。でもその時たぶん私はもう泣きそうな顔をしてた（笑）で、「家族の分、買えましたか？」って言うから「いやー2個までだから」って言ったら、「じゃあこれどうぞ」って。お兄ちゃん2人だから合計おにぎりも4個なんだけど、もう一人も「これどうぞ」って言うてくれて。

和 へえー。

橋 「えー！あーでもありがたい。ほんといいんですか、ごめんなさい、障害のある息子がいて」なんて言って。「全然いいですよー」って、2個もらって。でもお兄ちゃんたちのをタダでもらう訳にはいかないから、「とりあえずお金だけは」って。「いらないいらない」って言われたんだけど、お金だけを「ごめんなさい、もらってください」って言って。

和 いらないって言われたんですね。

橋 いいですいいですって言うてくれて、ほんとに良い子たちで。で、そうやっておにぎり4個ゲットして帰ったりした時、「あーなんか、日本の若者も捨てたもんじゃないな」って。

和 ほんとねえー。へー。

橋 あとはその頃って、火が使えるお店はお弁当みたいなのを出してて、皆さんシャッターが閉まってるところに貼って、「どここのお店が何時に……」とかね。

和 あー、情報ね。

橋 そうそう、「お弁当何個売ってます」とか、そういうのが始まりましたよね。

和 うんうん。

橋 で、旦那が1日おきぐらいに帰って来る時に、そういうふうに通ってあったからお弁当買えたとかって、お弁当買ってきたりとか。あとはマンションの掲示板に、ピッピッと画びょうで「どこのお店が〜」「生協は一人何個まで」「何時から何時までのあいだ〜」とか、「行列で1時間待った」とかそういう情報が。「ガソリンスタンドはあそこは開いてないけど、こっちの遠くまで行ってみた」とか、そういうのが貼られるようになって。だけど「あー、ガソリンスタンドも並べないんだよねー」って。うちからすぐ近いんだけど、結局息子を置いてくことは……並んじやったら何時間かかるか分かんないから置いていくことはできない。乗せてったら大騒ぎになっちゃう。待ってる理由が分からないので暴れちゃうから、並ぶことはできない。お水は、実は徒歩で15分ぐらいのところにある学区外の学校で、グラウンドの蛇口とかで給水が始まってるという情報もあったんだけど、並べない……。お水が、並びたいけど並べないーって。8階だし。

和 持って上がったりすること？

橋 なかなか、うん。ご近所のおじちゃんおばちゃんにも、なかなかちょっとそれは頼めなかったの。

和 あのポリタンクねー。8階までね。

橋 8階までよろしくとは、ちょっとなかなか言えなくて。ほんとにギリギリまでは。お風呂のお水とかはあったけど、飲み水がどんどんやっぱり底をついて、あーやばいなやばいになって。旦那に持って来てって言っても、やっぱり買えないとか。彼は県の職員だったから遺体安置所とかに詰めていて。

和 大変でしたね。

橋 そういう仕事をしてたから、そこで「買い物行ってきて」も言えないし、彼は彼で精神的にともしんどかった。

和 そうでしょうねー。

橋 その仕事は本当にしんどい仕事だった。

和 ねー、お家のことも心配はされてたでしょうけど。

橋 あんまり心配はしてない（笑）

和 いや、きっとそこはやっぱり、奥様にすごく任せてらしたんでしょうね。

橋 うーん、でもそれはね、誰かがやんなきゃならない仕事だから、それは仕方ない。だけど、水がちょっとやばいんだよねーって。どのくらいもつかみたい。3日を切ったらやばいねーって。やっぱり息子を置いて私が行かなきゃならないかもしれないと思うと、ちょっと余裕を持ってじゃないと行けないねーとかいろいろ考えながら。で、うちの町内会は、マンションの町内会だった。うち結構大人数のマンションだから、それ1個で町内会1つなので、1階に会長さんが住んでいて、その人のお宅も実は知的障害の、もう大人だけれども、息子さんがいて。

和 同居されていたんですか？

橋 同居はその時はしてなかった、息子さんはいなかったと思う。別のグループホームとかにいたと思うんだけど。

和 あ、なるほど。

橋 そこにちょっと仕方ないから……仕方ないっていうか（笑）ほんとにはもっと早く、今になって思えばもっと早く相談すれば良かったなって思うんだけど。

和 うん、分かってくださる人なんですわね。

橋 うん、とても分かってくださるけど、8階からの出入りも、なんか電話で軽く「よろしく」って頼むことでもないし、なかなかちょっと電話で頼めなくて、1階まで降りてって、「あのー申し訳ないんだけど、水が底を尽きそうなので、マンションのタンクのお水を特別にいただけないでしょうか」というお願いをしに行ったんだけど、会長さんもすごく気持ちのある人で、たぶんあちこち飛び回ってて、いなかったんですね。で、お嬢さんに伝えたのかな。「分かりました。じゃあ伝えときます」って、20代だったかの娘さんに伝えてきたら、1時間後ぐらいにそのお嬢さんがピンポンって来て、「じゃあ私行ってくるから、何か汲むものあります？」って。「え？」って驚いて。なんかでっかいペットボトルの空いたのとかを、「このくらいしかないです」って言ったら「あー分かった分かった、じゃあ待っててね」みたいな感じで。「えーいいんですかー」って。もうすぐにその方が動いてくれて。結局お父さんは忙しくて帰ってこなかったみたいだけど、お母さんと「そういうふうに（橋本さんが）言ってきたよ」って話してたみたいで、

あそこのうちも自閉症だ、並べないしお父さんも帰って来られないはずだから、じゃあ私が行ってくるわって、たぶんお嬢さんが、お母さんに言われたとかじゃなくてお嬢さんが自分で「行ってくるよ」って動いてくれたんだと思う。車も運転する方だったからやってくれたみたいで。うちが頼んだもの以外に、もうちょっと大きいものとかも汲んできてくれて、2回に分けて上に運んでくれて。「ありがとうございますー」って本当にもう神の助けみたいな感じだったけれども、すごいサクサクしたお嬢さんで「また困ってたら言って！」みたいな感じで、「電話でいいよ」って。「ありがとうございます」って助けてもらって。あーなんて良い人！って、かえってお父さんじゃなくてその娘さんに伝えたことが良かったのかなと思うぐらいだったけど。後から考えたら、全然もっと早く相談しておけば良かったんだって。迷惑かけちゃいけないとか、みんなが大変なんだからっていうので、とても言い出せなくていたんだけど、もっと早く言っておいたほうが逆に良いんだなって思いました。それはその時には分からなかったこと。

和 そっか。

橋 そんな感じで人に助けてもらいながら、うちは何とかなったし、なぜか息子がその時は本当に大人しくしてくれてたので、良かった。でもそれが大人になって、だけど行動とかが大変になってる……例えば人を叩くとか、親を叩くとか、そういうふうな時期だったらもっと大変だっただろうしって思ったら、そういう人がいたんじゃないかなと。その時いなかったはずがない。福島、宮城、岩手の中で、うちよりもずーっと困ってた家が、家族が亡くなったとかもあっただろうし、あったはずなんだって。だけどそういう情報ってあんまり出てきてなくて、本人たちが発信しづらいんだらうなって。それはやっぱりなかなか言い出せなかった私はとても分かる。自分から発信ができない、難しいし、それって時間が経てば経つほど、「あの時困ってて」とかっていう話はなかなか話題にはのぼらないし、亡くなった方がいたことを考えたら、そっちが一番だよなと。うちはそんなこと言えるようなあれじゃないからとか、たぶん皆さんどうしても日本人は思うだろうな一って。なかなかそういうことって……一般の方達のあの時こうだったあだったって、写真も出てくるし、メディアテークとかはそういうデータ、声のデータも残していろいろ活動をやってるけど、知的障害者の重度の人たちのコアな部分って、果たして残っているんだろうか。みんな言ってるかな、ちゃんと。言ってもいいんじゃないかなって。時間が経ったからこそ、あの時どうだった、本当はこういうことがあれば良かったっていうことを、残したほうがいいんじゃないかな一っていうことを、だんだんフツフツと、時間が経ったぶん逆に言えるんじゃないかなとか。どうしたらいいんだろうな一っていうことを、たまたま喫茶店でお話ししたら……（笑）

和 なんかガシッとストッパーがかかっていたのが、やっぱり年月でそのストッパーが経年劣化するみたいなのも、逆に良いふうにも考えても良いんじゃないですかね。

橋 カタンと何か外れたの。

和 そうそう。タガが緩むように。そして思いが初めてほとばしるみたいなことってというのが、やっぱ10年必要な人もいれば、もしかしたら20年必要な人もいるかもしれないし、と思います。

橋 うん。神戸とかそういうところで、実は発信してる人がいるかもしれない。けれども、宮城とはつながってないって思えば、できることならつながりたいし。東北は津波の被害とか、そして広域っていうこともあったけど、神戸とかはすごく都市型の被害でしたよね、火事とか。そういうことで困ったこととかもあっただろうし。これから絶対に、この地震大国で大きな地震がないとはとてもとても思えないので。

和 うん。ありとあらゆる環境、その場所の条件のところで「起きる」ってことですよな。

橋 地震じゃなくてもそう、水の被害とかでも、家を失う地域もあったりするし。

和 うん、いろいろあったじゃないですか。

橋 毎年毎年、線状降水帯とかで水の被害があって避難しなきゃいけないとか、そういうところもあると思えば、避難のことをもっと開かれてっていうか、普通の小学校とかの避難所に、部分的に知的障害の人とかが逃げ込めるような……皆さんの体育館とはちょっと離れた場所でできるところがあれば、そんなにそんなに、数の少ない障害者センターとかが請け負って、そこに全然入り切らないっていうことよりも、たくさんのところにちょっとずつあったほうが、周りの人も助けやすいのかもしれないっていう気持ちも出てきたから。そういうのは、いやいや違うよ、もっと専門的な助けがいるんだからやっぱり普通の小学校じゃないほうがいいよっていう意見もあるかもしれないし。もしそういういろんな意見が集まったら、少し方向性を固められるかもしれないので、うん。まずはでも今日はお話を聞いてくれて……。

和 いや、まだまだ今、震災が起きてから何日目ぐらいまでですか。

橋 (笑)

和 ほら、その数ヶ月先？あるいは1年先、3年先のお話がきとおありになると思うのね。

橋 そうですねー。

和 今フツフツと思ひ出す、なんか心の中にある「あーあれは結構痛手だった」みたいなこと、何年も経ってからとかでもありますか？

橋 痛手はたぶんうちは……被害が少なかったほうだと思うので、うーん。あ、そうだ、家にこういう障害のある人がいて、しかも例えば老人もいるかもしれない、介護してる老人もいるかもしれない。外に出れない人がいるっていう時に、今はとにかく発信手段が、まあその時にバッテリーの問題とかが絶対出てくるから充分にできるとは言えないけれど……SNS とかが発達してきてる時だから、発信して、家にちょっとした手助けをしてもらっている仕組みをもしかしたら作れるかもしれない。どっかの誰か知らない人によろしくっていうこともあるかもしれないけど、「その地区のこの人困ってるよ」「じゃあ同じ地区の私が動けますよ」「分かった、水2リットルだけけど持って行きますよ」とか。行政に助けてって言ってもその時に来てもらえるわけがないので、何か少し仕組みを作れば、近くの若手というか動ける人に、例えばうちの障害のある人の吸入をしてくださいますとかそういうことじゃなくて、「ちょっと水を持って来てほしい」とか、「ちょっとした何か望んでいることをどこどこに伝えてほしい」とかね。高齢の方がいたりとかすると、パソコンだったりスマホで発信ができない方が必ずいるはずだから、この助けがいる、この薬がいるとかそういうことを伝えたいんだっていうこととかも、御用聞きではないけれども、近くの人が「あー分かった、はい、じゃあそれを伝えるよ」って伝える手段とかもあるかもしれない。だけど、それは出向いてもらわないと叶わないことがあるっていうことを、やっぱ発信しなくちゃいけないんだなって。避難所ありますよ、障害者はここに行けばいいんですよって行政は思ってるかもしれないけれども、家に出向いてもらわないと叶わないことがいつもある。

和 そういうことですよ。情報をもしもらったとしても、動けない状況。

橋 そう。それは知的障害者じゃなくてもそう、老老介護のお宅だったり、実はその時ケガをして動けないかもしれない人が、普段は動けてもその時は動けなくなってるかもしれないから、そこはちょっと手立てがいるんだなってことだけは、発信したいですね。仕組みづくりまではとても時間がかかるかもしれないけど、でも私、仙台ってこんなに大学生がいっぱいいて、大学生が集まってくる地域で、その時動けるよって人が少なくないと思う。ただ、知らない人のところに助けに行くんかかって、まあハードルが高いけれども、チャリで10分ぐらいのところ、やってもいいよっていう人がいれば、ぜひぜひお願いしたい (笑)

(後編)

お話：橋本武美

聞き手：わすれン！スタッフ

ス 時間が経って、こうやって障害児の親にお話を聞かれる活動を始めた理由を教えてください。

橋 1 回目に録音をした時にも後半のほうにお話ししたんですけど。震災のことを思い出すと、あの時はすごく大変だった。障害を持ってる家庭ならではの大変さがとてもたくさんあって。だけど今、ちょっと整理できるぐらい時間が経って考えると、ああもっと自分にできることが、備えておけることがあったな、普段の生活の中でやってあげれば良かったな—ってということがいろいろあったので。近しい友達とかでも、うちよりももっともっと大変なおうちがたくさんあったんだけど、友達としていろいろ話はするけど、実はこういうことが大変だったとか、実はこういう助けがあったんだよとか、聞いてないこととかもあるかもしれないし。東北でこういうことがあったけど、みんなもう結構忘れかかってきて、備蓄とかももうそんなに気にしなくなってきたりしてるけど、やっぱりちゃんとやっというたほうがいいんじゃないかな—って。自分もう忘れてて、5 年保存水とかも全然切れてるし（笑）あーちゃんとやり直さなきゃな—って。時間が経ったから、ちょっと整理し直して話を聞いたりとか、自分も一緒に思い出して整理されて、ほかの方のことを聞いて学べることもあるかもしれない。

自閉症とか発達障害のおうちって、なかなかそれを発信しにくいんですよ、どうしても。遠慮もあるし、知られたくない—ということもあるし、分かってもらえない—ということがもう結構大前提にあるので、あまりみんな外に出さない、困り事とかも。だけど神戸のこともあったし、そのあと大きな水害とか、自分の家に住んでいられなくなっちゃ—うような障害者のご家庭が普通にあるんだから、そういう話を少し溜めていけば、些細な生活の中のことで、他の人が聞いたらすごく大事なことから、ポイントなんじゃないの—って—ということがあ—るかもしれない。まず、私が一人ずつお話を聞いて少し整理して、それをわすれン！さんのほうでデータとして「じゃあこういうところをもうちょっと聞いたほうがいいんじゃないか」とか、「こういうところがまとまれば先々何かに活かせるんじゃないか」と—って—ということがあ—るかもしれないな—って—のを、ポツリポツリと自覚し始めたところで友人と出—会—って、「私が協力するよ」と、わすれン！の録音小屋に一緒に入ろう」と—ポ—ン—って背中を押してもらって。すごく自然で、「じゃあこの日に行こうね」と—す—ぐ録音できたので。そこでまた手伝っていただける方とも出会えたので、そういうタイミングだったんだろうな—って—感じてます。

ス 震災直後とか、5 年後とかのタイミングでは、まだ振り返ってどうだ—と—かって—いう—感—覚—ではなかったんですか？

橋 うちの息子は震災当時 10 歳だったんだけど、そのあと中学部に上がるとか、思春期に入るとか、日常でどんどんどんどん困り事が出てくるんですね。クリアになることもあるんだけど、いろいろ出てきて、安定して落ち着いていられるわ—っ—て—いう時期がなかったんですよ（笑）ちょうどそんな時期だったので、振り返って整理するタイミングはなかった。軽度の知的障害の人達は、例えばイオンとかそういう大きい会社が特例子会社とかを作—っ—て、一カ所で 20 人ぐらい働いたりしてる人達もいるんだけど、知的に重度の人とか自閉症の重い人とかは、働く場所も少ない。進路がとても限られているところを、言葉は悪いけど、みんなで奪い合—っ—て—じゃないけど……枠が 2 つしかないところに希望者が 5 人いたら、うちの子が入れるかどうかとかを、高等部になるとものすごくせめぎ合—う—ような。その辺もおかしいことなんだけれども、実際、特に宮城・仙台とかはそういう状況になってるので、ほんとにみんな、20 歳ぐらいまではなかなか落ち着けるような状況ではないんですね。なので、私の仲の良い人達とかも、みんなが大人になって、今だから振り返るよ—な—って—いう時期なので、今だから「ちょっと時間ちょうだいね」と。すごく大変な時期ではないから。だから高 3 のお母さんとかには声を掛けられないし、いま大変だよ—ね、それどころじゃないよ—な—って—いう。そういう生活の中の大変な時期があるんですね。その辺もやっぱり、一般の方には分からない難しさがあ—っ—て。

ス そうか。だから今なんですね。

橋 そう、だから今だったし、やりたいや—り—たい—って—ず—っ—と—思—っ—て—は—い—た—け—ど、どう進めていいかも分からなかったの—で—。

ス 最初、喫茶 frame さんでお話をしたんですね。

橋 うん、喫茶 frame さんで、震災当時の新聞とかを展示にしている。そういうのを見ながらオーナーさんと話をしたりとか。オーナーさんはうちの家庭のことを分かってくださっているの。その頃はああでこうでーとか話をしながら、「そういう話って結構大切かもね」ってそのオーナーさんにも言ってもらったの。それで、「やっぱり私、それやんなきゃダメですね」って。他のお客さんもそうだそうだって（笑）

ス いいお店ですねー（笑）みんなに応援されて。

橋 今がそういうタイミングなんじゃないの？って。やりなさいとかってそういう高圧的なじゃなくて、すごく自然に押してくれたの。

ス 個人的にちょっと気になったのが、この間皆さんに病院の話も聞こうっておっしゃってましたけど、皆さん薬飲まれてるんですか？

橋 結構飲んでる人が多いっていうか、重度になればなるほど服薬してます。

ス それはどういう？

橋 うちが一番最初は睡眠障害があって、24 時間が普通の人と違うんですよ。普通の人って、25 時間を頭がリセットしてくれて、で、リズムを作るとかあるじゃないですか。そういうのができないから、息子は夜 3 時ぐらいにガバッと起きて、歌う、笑うみたいなのがものすごくうるさくて、マンションでとても困ってて、一番最初それで病院にかけ始めたの。

ス 一番最初っていつだったんですか？

橋 4 歳か 5 歳ぐらいの時に、大学病院に有名な先生がいたのね。すぐお薬を出してもらって、まずお薬を飲みながら睡眠を整える。睡眠薬ではなくて、睡眠を整える。そうしないと普段の本人の情緒が落ち着かない。

ス 毎日、朝晩とか飲むんですか？

橋 その頃は朝晩飲んでたかもしれない。お薬って変わることがあるのね。病院の先生も替わるし、特に大学病院とかは先生が割と動くので、替わるのね。そうすると出す薬も変わっちゃったり。その先生が使う薬を出されるから変わったりするので、本人の体調とかにもまた合わせて調整して、これは使えないとか、じゃあまた変えましょうとかってなるんだけど。うちはたまたまずーっと合う薬で来てて、中学部ぐらいかな、病院が変わったの。大学病院のその有名な先生がいなくなって、あー他の先生じゃ意味ないわって（笑）相性もあるし、その先生の知識もあって通ってたから、他のところに変わることにした。今は精神のほうの病院なので、情緒的なことがものすごく相談できる。当然先生は違う方なので、お薬が変わって、今は夜 1 回だけ飲んでます。あとはどうしても知的障害も重いので、突然声を出すとか、突然回るとか、やっぱり社会生活の中で不適切な行動って出ちゃうんですよ。音とか光にもものすごく過敏な部分を持ってるので、何に驚いて、何に動揺してるかが親も分からない。それで、急に暴れ出すとか、急に大声を出し始めるとか、そういうことを減らすために、その情緒の波をちょっと緩くするような、落ち着く薬を飲んでる人が結構多い。そういうのって 3 ヶ月分とかもらえるから、その震災の時にいっぱいあった家はいいけど……。

ス 補充のタイミングだったら。

橋 そうそう。10 月に会った人だったかな、そのお薬がすごく不安で、あったんだけどその先どうなるか分からないから、薬をもらいに行ったの。そしたら 2 週間分しかもらえなくて。そちらのお宅は紙パンツも使ってたんだけど、赤ちゃん用じゃない紙パンツってそんなにお店にも置いてなかったりするから、当時は普通のオムツすらも買うのが大変だったけど、そういうのも大変だっただろうなーと思う。その方は、遠くから紙パンツをいっぱい送ってもらった。「買えないでしょう？」って。それで助かった。やっぱり薬でも困った人がいっぱいいるだろうなーと。

ス その時、身近にそういう状況を知っている人がいるのも良かったけど、物資がある遠方の地域にそういう人がいるっていうのも、結構あの時は分かれ道だったなーと思って。送ってもらうことができるかできないかとか、届けてくれる人がいるかいらないか。同じ地域だとみんなが買えないから。

橋 そうだねー。

ス 普通に通院が再開できたのって、どれぐらいの時期だったんですか？

橋 いつ頃だっただろう。病院にもよる。うちとかみたいに大学病院だと、基本なかなか難しいじゃない。一番災害対応の要所になってた病院だから、本当に行きたくなかった。お薬がなくなったとしても行きづらい状況ではあった。

ス 行った時に大変だったこととかありました？

橋 でももちろん大学病院だから、「そういう普段のお薬をもらう人はここから入ってここで話をしてください」みたいなことがすぐにできてたので、そういう対応はやっぱりさすがだなんて。混乱してる中に行って「すみません、うちはそうじゃなくて普通の薬が欲しいんです、診察とか無くていいんですー」みたいなことはしなくて済むから、なるほどと。

ス そこはもう万全になってたんですね。

橋 うん、万全になってましたね。そうじゃない病院はどうだったんだろうなー。もうちょっと、例えば1回話を聞いた方にも聞いてみてもいいかもしれないと思う。

ス 薬が買えなくて困ったっていうことは、そんなに無かったんですか？

橋 それはあんまり聞かない。うちもそうだったんだけど、結構その時は、普段すごい大暴れちゃんみたいな子も大人しく（笑）

ス なんか、皆さんそういうふうにおっしゃってましたよね。

橋 そう、どっちかっていうと大人しくなる傾向が。パニクらずに。ただ本人も、何だ何だ、お母さんもすごく大変そうだなみたいなことを、もう察知して。なんて言うんだろう、こうなるよりも、こう一なった。自分の中に……。

ス 閉じる、みたいな感じなんですかね。

橋 うーん、閉じる。それはたぶん本人の心を守るためにも、閉じる方向になってたお子さんが多いと思います。話を聞いていても。うちもそうだった。

ス それは意外でしたか？

橋 意外でした。うちもそうだったけど、ああそっちもそうなんだ、こっちもそうなんだって。

ス 一番大変だったことって、どのことでした？一番っていうのは特に無いですか。

橋 一番大変だったのは……物資的にはやっぱり水で、うちの場合は水を汲みに行けなかったから飲み水なんだけど。そうじゃない部分で言えば、もっと情報を取れるようにしておけば良かったかなって。

ス そうか。ネットワークがあればって話をされましたもんね。

橋 そう。

ス 話を聴いた方の中で、地域みんなが知っていたから助かった、っていう方もいらっしゃいましたね。

橋 そうそう、その部分はうちはすごく弱かった。あんまり周りの人に助けて助けてを普段からしてなかったから。全盲の方とかは周りが自然に、そこのおうちはこういうことで困ってるだろうなって、分かりやすかったりするけど、うちはそうではなくて。

ス 確かに想像が及ばないですね。

橋 うん、そこまでは本当に。地震が来る来るとは思ってたけど、あんなに長く影響が出るとか、学校が長く閉校になるとは思ってたなかったねー。ネットワークづくり。ネットワークって言っても結局、広域でみんなが被災者になるから、ヘルパーさんに助けてほしくても、いやうちも被災者で、当然家庭があってとかなるから。1回目に録音させてもらった時に、動ける人達でつながって、専門知識がある無いじゃなくて、本当にちょっとしたことで、例えば「水を2リットルだけお願いします」とかそういうので、「近場にいる自分はチャリで動けるから行けます」みたいな、そういうネットワークとかができないもんかなーみたいな話をさせてもらったんだけど。

ス 仙台は学生さんとか多いから。

橋 そうそう、福祉大があったりとか、学院も街なかに来たし、ね。県北のほうなら仙台大学とか体の強い（笑）体育に強い人達、動ける人達がいっぱいいたりとか。

ス そうですね。そしてたぶん、何かしたいけど何をしたらいいか分からないって思ってる人達も、その当時はたくさんいたことも後から分かってるわけだから。

橋 そう、すぐにそこまで構築できなくても、そういう助けができるかもしれないよーっていうことを言ってもいいかなと。そしたら、「こういう方法がありますよ」とかって、それこそ大学だったり学生さんとかで、もっとうまくできますよっていうアイディアが出たりするかもしれないし、やっぱり知ってもらうことなんだなーって。

ス 確かに、ただ水を運ぶだけで役に立てるとかっていうことは分からないですもんね。分からない自分は手を出しちゃいけないんじゃないかって思っちゃう……。

橋 うんうん、自分には無理なんじゃないとか。

ス でも、ただ買って来たり運んだりするだけで助けになるっていうことは、知れたほうがいいですね。

橋 本さんは、震災で大変だったことを知ってもらいたいけれど、日ごろから困ってることもかも知ってもらいたい？

橋 そう。それは、私がおもっちゃんと周りに「こういう子でこういうことをやっちゃいますけど、本人に悪気はなく（笑）」みたいなことを、もっともっと、ちっちゃい発信をたくさんしておけば良かったな一って思ってる。小1から遠くの支援学校にスクールバスで行くと、地域の小学校に通ってないから、そこで結構ストップしちゃう。

ス なるほど。お家の周りの人には知ってもらえる機会が少なくなっちゃった。

橋 いるっていうのはみんな分かってはいるけど、どう助けたいかみたいなことはたぶん誰にも分からないし、その頃私もどう助けてもらえばいいか分かってなかったな。いっぱいいっばいで（笑）

ス そっか。「何かあれば言ってくるだろう」みたいな感じでみんな思ってたんですね。

橋 うんうん。

ス 当時 LINE とかがあったら、ちょっと違ったと思います？

橋 そうだねー。そう思います。LINE があって、セキュリティーがちゃんとしてる状態であれば、もっと発信しやすかった。

ス いっぱい宛先を入れてメールを一斉送信するしかなかったですもんね。そういう連絡とかはしたことありましたか？

橋 あの時、たぶん私はメッセージとか SNS とかやってなかったと思う。インスタもやってないしフェイスブックもその頃はやってないし。

ス 当時無かったですよ、まだ。

橋 そんなじゃなかったよね。

ス フェイスブックも流行ったのは震災のあとだと思う。ツイッターだけですよね。

橋 ツイッターは今もやってなくて、1回も手付けてないのね。なんか信用してないので（笑）

ス でも当時はツイッターだけがつながりましたね。

橋 そうよね。すごく役に立った部分があったんだもんね。

ス うん、あの時はまだ穏やかな SNS だったから（笑）

橋 そうだねー。このお店がやってますとか、そういうのがツイッターに上がってたもんねー。

ス そうですね。拡散希望で、「誰々が困ってます」っていうので、近くの人が助けに行くみたいなのはありましたね。

橋 ただやっぱり、親の会とかからメールの配信とかはあったから、それは来たの。メールはつながりやすかったじゃないですか。でもやっぱり間違った情報も来るから、これを信じちゃう人いるんだろうなって思うと、やっぱり怖い部分が……。たぶん良かれと思って発信してるから。ヨウ素を飲むといいとか、原発関係で不安な人達には配りますとか、そういう情報が来て。一カ所だけじゃなくて、他からも入って来てたし。

ス うーん。確かにデマもあるし、もう少し信頼できる情報源が必要？

橋 そうだねー。たぶん今なら行政でも、仙台市とかそういうところでも、もうちょっとちゃんと LINE とかで発信できるよね。確実なことを公式に。「いろいろ情報があるかもしれないけどここを見てください」っていうことも、さすがにできるよね、仙台市でも……とって（笑）

ス でも、普段からその仙台市の情報をフォローしてないと、その時にわざわざ見に行くのかな。

橋 どうなんだろう。でもそういう時は強制的に入ってくる情報ってあるでしょ？

ス あ、エリアメールみたいなやつとか？

橋 そうそう。エリアメールって強制的に入ってきて、すごい音でビックリする。音もね、穏やかにしてほしいの（笑）

ス ビックリしちゃいますね。

ス 今までいろんな方に話を聴いてこられて、武美さんの中で、これは共通してるなとか、逆に思ったのと違ったな一とかはありますか？

橋 みんなほぼ仙台市だから、すごい備蓄してたんだなって。特に食料は、みんな備蓄をすごいしてたんだなっていうのは思った。春雨の子もすごいいっぱい（笑）しかもやっぱり知ってる人からももらったり。

ス やっぱり周りに言っておくって大事なんですね。

橋 そのお宅は本当に困ってたから、それはみんな知ってて。それしか食べれないんだ、だけど元気だよって(笑) そういうネットワーク的なことって意識してなくて、知ってもらってたから助けがあったっていうようなのは、すごく気づかされた。

ス 震災後、意識的にみんなに知ってもらおうとかはされました？

橋 民生委員さんとかと連絡を取って、そういうことがあった時に助けがいる人だ、みたいな登録はさせてもらった。あと何だろう……ずっと同じマンションに住み続けてるんだけど、すごく人の入れ替わりがあって、これはダメだっと思ってている。

ス そっか、なるほど。

橋 今って町内会の活動とかがどんどん無くなっていったでしょう？うちのマンションもだいたい前に町内会が無くなったの。で、余計にダメだ……って。

ス 面倒だと思ってる人もいますよね、町内会は。

橋 うん。高齢者が多くなってきてるから立ちゆかなくて、役員をやってくれる方がどんどんいなくなってしまうから、そうなる。だから、近所の方達のネットワーク的なことは、今は逆に難しくなってる。でも障害者の支援に関してのネットワークはその頃より強くはしている。ショートステイで泊まりに行くところとか、ヘルパーさんも2カ所、割と近場の方とかに。ショートステイとかで泊まりに行くようなところが、最近マンションのお向かいに偶然できたの(笑)びっくりするところにできて。

ス 最高だ。

橋 とてもありがたいところにできた。実は今日も泊まりに行きます。すごくありがたい。それでも、みんなやっぱり難しい人たちだから、必ず「ここでいいよ」ってなるとは限らないから、「いいよ」ってなったので本当に良かった(笑)

ス 震災当時は、ユウヤさんはまだ書をやってなかったんですか？

橋 やってなかった。

ス じゃあそのつながりは無かったんですね。

橋 無い。書かなかったし、そういう人に教わる場所にいらなかった。

ス いつからなんですか？

橋 震災の年の秋に、幸町の宮城県障害者センターで書道の体験教室があって。そこはちょこちょこ行って場所も知ってるから安心できて、私が車でちょちょっと連れて行けて、パニックったら車に乗せて連れて帰って来れる場所で。障害者センターだから、途中で「ヤダー！」とか「帰るー！」とかパニックになっちゃったってなっても、そんなに迷惑をかけないところなので、行ってみたの。本人も知ってる場所だから、普通に嫌がらずに行った。で、最初からガーってすごい書いてたから、ビックリした。でもそこで出会えたので、本人のストレス解消にすごくつながってるのね。書だから、絵筆とかじゃない毛筆の筆で、墨で。墨って香りが結構落ち着く香りだし、毛筆のシュルシュルシュルみたいな感じて、すごい気持ちいいんですよ。子どもの時はやってたけど今はやってない方とかがやると「気持ちいい」って(笑)なんかやっぱり癒やしがあるんだなって。でも思春期になっていく彼とかは、グアアって紙も破り破り(笑)ものすごい、半紙とかその下に敷いてる新聞紙とかも破り破りとか、すごいエネルギーで、パワー有り余ってるし、ストレスいっぱいなんだなーみたいなこともぶつけて、そういうことに出合えて良かった。そういう、本人のお楽しみみたいなことを震災後に探してて。すごく探さなきゃいけない、見つけなきゃいけない、私は……って。

ス それは震災があったからそう思ったってことですか？

橋 そうそう。本人がどんどん貝のように閉じこもってて、私も助けてあげられない。あなたの好きな物を、チラシも持って来てあげられないし、好きなテレビ番組も見せてあげられないし、何を差し出せばいいんだろう。何にもできないや、ごめんっていう。見つけてあげられなかったなーって。音楽はあったけど、音鳴らすわけにはいかないし。

ス そっかー、音。

橋 うん。すごく探さなきゃいけないって思ってた時に会って、無理矢理じゃなくて本人がすうっと入れたから。で、今も続いているし、たまたま指導してくれるのがすごく理解のある書家の先生で、すごい上手いし、高圧的じゃないし、先生先生してなくて、にーちゃん的な。「おーいいないいな！じゃあ次これやれー」みたいな。

ス 乗せるのが上手な感じ。

橋 うん。褒め上手、乗せ上手だし、本人もビリビリしてる感じのストレスいっぱいの時も付き合ってくれる、優しい先生だったから、ありがたい。

ス 探そうと思った時に、他のことも試したりはしたんですか？

橋 もちろん、音楽系のこととか、リトミックみたいなことも試してた、けど……。あと英会話とダンスとかも組み合わせたような、ちゃんと障害者のところとかも行ってみたけど、もうヤダ、2度と行かないって（笑）拒否られたので。やっぱり無理矢理はダメだから。合うものが見つかる、出会うのってやっぱりみんな大変って言ってます。

ス それを始められてから、その繋がりで見合いとかが増えていったり？

橋 本人は友達を求めるタイプじゃないから欲してないので、ずっとその先生とマンツーマンでやってるんだけど、私自身はすごくつながっていく。無理のない人たちとどんどんつながれてる。そのアートを始めて、息子の個展を18歳から始めて、フェイスブックも始め、インスタも始めて、ありがたい人たちとすごくつながってってます。

ス じゃあそれはセーフティネットでもあるというか。

橋 そうだねー。そして自信を持たせてもらってるし。「これはちゃんとしたアートだよ、出しましょう」みたいな。やっぱり親って「え、こんなもの」じゃないけど（笑）これをアートと言っているのかなっていう迷いがずっとあったから、18歳まで個展はやってなかったけど、画家の人とかイラストレーターさんとかプロの方に「出しなさい」って言ってもらえたりとか。そうか、言っているんだっていうのがあって、出すようになった。

ス 18歳ということは、何年前？

橋 今23歳なので、5年前。震災から7、8年経った時。一番最初の個展を、うちでやりなさいって言ってくれたギャラリーカフェの方が「ちゃんと金額をつけなさい」って。例えば、うちの息子のこういうものですけど2万円です、とかって、私の中では「い、いいんだろうか」って。売れるわけないだろうとか、どういう基準で金額をつけたいのかとかもまるで分からないし、個展って言っているのかな？みたいな気持ちもその時あった。だけどやりなさいって言ってもらって。でも支援学校に通いながらだと、お金を取っていいんだろうかとかって、ちょっとクエスチョンマークがあったから、個展をやりたいては高等部ぐらいから思い始めたけど、その18の卒業のタイミングで。

ス あー、なるほど。

橋 3月だったんだけど、卒業ですからちょっとお金関係のことの文句はやめてくださいみたいな（笑）一応そこを線引きにした。学校に在籍してるあいだは何か言われないように、卒業のタイミングで。そういうのも、やっぱり遠慮みたいなものがずーっと自分の中に、今でももちろんある。けど、今は「アートです」って言っている。

ス ここ5年でその辺は劇的に変わったんですか。橋本さんの中の感覚とかも。

橋 変わりました。うん。自信を持たせてもらって。「彼はこういう人だけどアーティストでもあります、得意分野があります、あなたはすごい人だよ」って。その部分は本人を褒め称えて、あなたはアーティストですって。お金を出して買ってくれる方が、ファンですって言ってくれる方がいるんだよってというのは時々言っていて、本人も「へへん」っていう感じで（笑）。

ス 書き始めてから、情緒的にも変わってきましたか？

橋 やっぱり書くことで、そのマグマのようなストレスのはけ口にだいたいぶなってるので。思春期にはちょっと私に手が出ることもあったんだけど、家庭の中だけならまだしも、それ以外の方に行ってしまうことはとても怖かったので、それだけはなんとしてでも収めたいって思っちゃうんですね、母親なら絶対。でもそうならずに済んだので。そして先生も誰でもオッケーではない。「あ、そういう状態ならちょっと休んでください」って普通なら言うと思うの。こんなに落ち着かなくてとか。普通なら「やめてください」とか「じゃあ今日は帰る？」とか言って帰らされたりすると思うけど、その先生は「そうだよなー、じゃあここで吐き出せー」みたいな感じで、紙とかがダメになっても全然いいよって。

ス うんうん。でもそれだけの凄みがあったんじゃないかっていう気がしますね（笑）

橋 うん、結構すごかった（笑）

ス 書くってことへの。やめろなんて言えないような（笑）

橋 （笑）申し訳ない。でもそれもその先生だから出せるもので、誰にでも出すわけじゃなくて、心を許してるから出すのね。だからやっぱりそういう人と出会えたことは、すごくありがたい。ヘルパーさんでも誰でもオッケーじゃ

なくて、彼らは選ぶので（笑）やっぱり合う人との出会ってすごく大切だから、アート関係のこととかも、「いや、うちはそんなんじゃないです」とかっていうお母さん方が多いので、そこを一步踏み出してほしいなって、ずーっとそれは言ってます。

ス その先生のところに今も行っているんですか？

橋 うん、ずーっと。月に1回やってます。障害者センターで、私が場所を予約してやったり。すごく大きい紙で、大きい筆で、書道ガールズみたいを書く時もあるんだけど、そういうのは先生のお宅で。

ス 作品を作る時は、ご自宅でもしたりするんですか？

橋 自宅ではほとんどやらない。それは息子が、ここでは頑張る、他ではしない、っていうタイプの人なので。家で私が「やれやれ、書け書け」っていうオーラを出すと嫌になっちゃうの、やめちゃうの。お願いだから続けてほしいって思ってるので、だから家では極力やらない。

ス じゃあ、月に1回作品を作ってるんですね。へー、そうなんだ。

橋 うん。でもちっちゃいものなら100枚ぐらいとか、もうガーガーって書くし。